
PSYREN 『レモン色の煌髪』

マヨラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PSYREN『レモン色の煌髪』

【Nコード】

N4789H

【作者名】

マヨラー

【あらすじ】

本当は、いつまでもアンタと一緒に居たいから。本当は、すこしでもアンタに好きになってもらいたいから。いつも冷たくしてるけど…アタシだって、本当は…。

「髪：伸びてきた？」

風呂上がりのフレデリカが、更衣室で呟いた。

濡れた金色の髪が、フレデリカの目を覆い隠している。

ドライヤーで乾かし、いつものように真ん中で分ければ、まだそこまで気になる程の長さではなかったが、やはり少し長い。

(明日にでも切りに行こうかしら…。)

髪を乾かし終えたフレデリカは、更衣室を後にした。

『レモン色の煌髪』

…次の日。

2

フレデリカは、散髪に行くために根の廊下^{ルート}を歩いていた。

根の住人の中に、地球崩壊前に美容院を営んでいた人がいるので、フレデリカはいつもその人に切ってもらっている。

目的地に向かって歩いてみると、途中でヴァンとすれ違った。

「あれ？フレデリカさんじゃないですか。散髪にでも行くんですか？」

「ん、まあそんなところよ。」

「そうですか、それじゃ。」

すれ違い様に交わした、何気無い会話。

すれ違って少ししてから、ヴァンが振り返って言った。

「あ、そういえばフレデリカさん、そっちの方、アゲ八さん居ますよ?」

「だから、何よ?」

「いやー?ただ言ってみただけですけど。」

そう言ったヴァンの顔は、少し笑っているようにも見えた。そのままヴァンは、廊下の角を曲がっていった。

「だから、何よ?」

一人で呟いた。

「あれ?フレデリカじゃん。」

ヴァンの言う通り、廊下を進んで行くとアゲ八に会った。

「何してんだ?こんなところで。」

「別に?ただ、髪が伸びてきたから切りにいく途中よ。」
「ふん:髪、切るのか。」

アゲ八がフレデリカの髪をじろじろと見回す。

「な、何よ?」

「ん?いやさ、もったいねえなあ、つて。」

アゲ八がフレデリカの髪の毛先を弄りながら言った。

「だ、だから何が言いたいなの!?」

いきなりアゲハに髪を弄られ、ドキツとしたフレデリカだったが、悟られないように平静を装いながら、冷たくアゲハの手を払った。手を払われたアゲハは、特に気にする事無く返事を返す。

「だから、俺は今のお前の髪ぐらいの長さが好きだって事だよ。もうちょっと長くてもいいけどな。」

アゲハがサラツと言った。

一方フレデリカは、何故か頬を赤く染めながら、必死になって言い返す。

「あ、アンタの好みなんて知らないわよ！長くしようと短くしようとアタシの勝手でしょ！」

「いや、だから俺はただ、今のお前の髪が……」

「あーもううるさい！！」

フレデリカはアゲハの胸を思いつきり突き飛ばすと、そのまま歩いてきた道に向かって早足で歩き出した。

いきなり突き飛ばされて後ろに倒れたアゲハは、早足でその場から離れていくフレデリカに言った。

「おい！どこ行くんだよ？髪切りにいくならそっちじゃないだろ？」

「アンタのせいで髪切る気失せたの！それに、切るも切らないもアタシの勝手でしょ！」

歩きながらそう言ったフレデリカは、振り返らずに角を曲がっていった。

「……俺、何か悪い事したか……？」

一人取り残されたアゲハは、女心ってよく分からねえ、と心から思った。

ずんずんと歩くフレデリカ。

歩いていると、再びヴァンに会った。

「あれ〜？フレデリカさん、髪を切りに行ったんじゃないんですか？」

「…やっぱりもうちょっと伸ばすことにしたのよ。」

「どーしてですか〜？」

「うるさいわねえ、アタシの勝手でしょ？」

「…ま、そうですね。」

ヴァンが言った。

そしてニヤニヤ笑いながら付け足した。

「アゲハさんの好みに合わせようと、フレデリカさんの勝手ですよねえ〜。」

フレデリカが、ピクツと反応する。

「あ、僕カイルさんの所に行かないと。ついでに、フレデリカさんが髪を切るの止めたこと教えてあげないと。」

ヴァンがフレデリカの横を歩いて通り過ぎた。

歩いていると、後ろからフレデリカの声が聞こえた。

「…まてや。」

「…へ？」

振り返ると、炎炎炎炎炎炎炎炎炎炎。

一面の、炎。

「あ、コレけっこうやばい…ですよね!？」

ヴァンは勢いよく走り出した。

「まてゆーてんやろが！こおんの糞ガキがア！」

後を追うフレデリカ。

この時フレデリカが纏っていた炎は、ヴァンがこれまで見てきたどんな炎よりも熱かったらしい。

紅蓮の女王フレデリカ様の、単純な女心のお話でした。

(後書き)

どうも、読んで下さり有り難うございました。どうしても、PSY
RENの小説が書きたくて書いてしまいました。これからも、暇が
あったら書いていこうと思いますんで、よろしくです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4789h/>

PSYREN 『レモン色の煌髪』

2010年10月14日16時44分発行